

オプション教材は勉強に余裕があるときに取り組んでいただく教材です。

オプション教材プラタナス 読解マラソン集

読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。
作文用紙の余白などに書いても結構です）

▼読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）
<http://www.mori7.net/marason/ki.php>

1.

2.

3.

4.

5.

次の文章はテレビ朝日の住宅リフォーム番組『大改造!! 劇的リフォームアフター』について触れた、斎藤環「家は家族を幸福にするか」の一節である(設問の都合で一部省略し、表記を改めたところがある)。

リフォームを担当する「匠」は毎回替わるのだが、ひとつ奇妙なことがある。「アフター」、すなわちリフォーム後の家は、毎回似通ったパターンにおさまっているように思われるのだ。中には、ほぼ定番と化したようなアイテムもいくつかある。暗かった家が明るくなったというイメージを強調するためか、採光はきまって大幅に増量され、しばしば天窓が採用される。必ずなされるのは収納の工夫であり、椅子やベッド、時には階段までもが収納スペースとしてフル活用される。狭い空間を目一杯活用するために、壁を可動式にしたり二段ベッドを採用したりと、匠の小技がもつとも発揮されるのがこの点だ。壁から飛び出すソファやベッドなど、果たして長期間の使用に耐えるのだろうかという心配はあるが。しばしば液晶テレビが配置されるのも、空間の節約のためだろう。(略)

この番組をみていて、トルストイの有名な警句がしきりに思い出された。そう、『アンナ・カレーニナ』の冒頭にかかれた言葉、「幸福な家庭は互いに似通ったものであるが、不幸な家庭はどこもその不幸のおもむきが異なっている」である。きわめて個性的な「不幸な家」から、ほとんど没個性と言いたくなるような「幸福な家」へ。もちろん、それぞれの「匠」たちが、限られた予算内で、持てる知識と技術を総動員して「空間の有効活用」という合理的命題を追求すれば、それが似たりよつたりになっていくことは避けられない。個性追求が没個性をもたらすという、なじみ深い逆説が繰り返されているだけだ。

それゆえ私の関心は、いったい視聴者はこの番組の「ビフォー」を見たいのか「アフター」を見たいのか、という点にこそ極まっている。もちろん善意の視聴者で、家族の幸せな顔を見るのが楽しみ、という奇特な方もいることだろう。しかし大半の視聴者は、む

しろ「ビフォー」を、つまり、リフォーム前のはるかに個性的な不幸の姿のほうをこそ見たいのではないだろうか。そのことへの後ろめたさが、幸福な「アフター」を見ることで緩和されるという流れになつてはいないだろうか。(略)

「ビフォーアフター」において顕著なのは、なんといっても「土地への執着」であろう。番組の性格上やむを得ないこととはいえ、登場する家族がいずれも「転居」ではなく「リフォーム」を考えている点は重要である。また、それぞれの家庭に共通するのは、とにかく「モノが多い」ということだ。衣類といわず食器といわず物品がところ狭しと溢れかえり、たとえば、衣類は押入用のプラスチック製衣装ケースにとりあえず詰め込まれ、無造作に床の上に積み上げられている。彼らの不幸の原因は、モノの増殖が居住空間を蝕んでいるせいではないか、と思えてくるほどだ。リフォーム後にあれらの大量の物品がどこにどう収まったのかはいとも謎なのだが、おそらくかなりの部分は処分されているのだろう。その意味では、リフォームはモノを捨てるいい機会にもなっているはずだ。

大量のモノが無造作に置かれるということは、家族が居住空間を「仮設的なもの」と考えているためではないだろうか。この状態が放置されているのはとりもおさず、「いつかは整理する」「いつかリフォームする」「いつか転居する」などとして解決が先送りされてきたからだろう。おそらくはこの点において、家族と家屋の問題は重なり合うはずだ。「理想の家屋」は「家族ほんらいの姿」であり、それは常に未来形にとどまるために、現在の家庭環境、あるいは家族関係は、ことごとく仮設的でありそのものどみなされてしまうからだ。



法学は、非常に精緻な技術の学である。その取扱う内容は、「所有権」とか「契約」とか「婚姻」とか「相続」というような、われわれの日常生活に深く関係したものでありながら、これらに関する法律或いは法学の内容は、素人にはわかりにくい概念や論理で複雑に構成されており、一言でいえば法学は「秘伝奥伝」的な技術の性格をもっている。その結果、人がひとたびこれらの技術に或る程度精通すると、普通の素人にはわからない秘伝奥伝の技術を身につけたと感じて、それらの技術を運用することに一種の職人的な快感をおぼえるようになる。はなはだ不幸なことに、多くの人は、法学をこのような職人的技術の体系だと思っているのではないであらうか。また法学部の学生は、そのような職人的技術をおぼえなければならぬことに絶望しながら、学生生活を送っているのではないであらうか。

多くの学生が法学に対して興味をもつことができないこと、また、仮りにもつたとしても、このような誤った興味しかもつことができないということのもつとも大きな理由は、おそらく、「法学とはどのような学問であるか」ということが、はつきりわからないことに因るであらうと思われる。法学は、一般の他の科学に比べて非常にちがっている。少なくとも、ちがっているように見える。法学の講義でもいろいろな「理論」が教えられる。しかし、その理論は物理学や化学等の理論とはちがっている。自然科学においては、否、他の社会科学においても、或る理論が正しいかどうかということは、実験や観察によつて——要するに、われわれの経験的事実によつて——決せられるのであつて、或る人々がそれを欲するかどうかによつては影響されたいはずであり、それが「科学」の特殊性である（教会が欲しなくても、やはり地球は太陽のまわりをまわる！）。（略）

要するに、科学としての法学が発言しうるのは、どの価値体系を選択すべきかではなくて、つぎのことについてである。すなわち、或る法的価値判断はどのような社会的価値に奉仕し、またその社会的価値はどの価値体系にとつてどのような地位にあるのか（価値判断と価値との関係、価値と価値体系との関係）、またどの価値体系はどのような利害関係を反映するのか（価値体系の社会的・経済的・政治的基礎）、社会の発展法則にもとづいてどの価値体系が

将来支配的のものとなるであらうか、等がそれである。なぜかと言うと、これらの問題に対する答えは、個人の信念や願望によつてでなく、諸々の経験的事実によつて検証しえられるものであり、そのような結論を求めることが科学の任務であるからである。そうして、このような解答によつてのみ、人は現象の発見と現象の制御・支配・変革という科学の究極の目的を実現することができる。

（川島武宜『「科学としての法学」とその発展』より）



日本にはそれぞれのイエに家業繁盛や先祖祭祀を中心とする「イエの宗教」があるように、会社にも社業繁栄の祈願や創業者への尊崇を核とする宗教的・象徴的表現形態が存在する。会社といえ、経済的利益をうみだす装置で、宗教的な共同体とは異なるというのが現代の常識かもしれない。しかしながら、会社は世俗的なもので、宗教は神聖なものであるという聖俗二元論は、日本の会社にはかならずしも当てはまらない。

日本人は私立の会社や学園が宗教的祭祀をおこなうことにあまり疑問をいだかない。家で神仏や先祖をまつるのとおなじように、会社が神仏や社祖の加護を祈願するのはなんら不思議なことではないからであらう。社員も個人としての信仰や宗教的帰属は異なっている、一部の例外をのぞけば、会社の祭祀に参加することにほとんどためらいはない。(略)

したがって、会社宗教を理解するための第一歩は、「イエの宗教」との比較である。イエは建物としての家屋を意味するとともに、家族のこともさし、家業と家産を継承し、先祖の祭祀をおこなう集団と考えられてきた。社会人類学的により厳密に定義すれば、イエは純粋な血縁集団ではなく、家族や親族以外にも奉公人などをふくむ

社会的な基本単位である。しかも父系、母系にこだわらない双系的な集団であって、ひんばんに養子縁組をとおしてイエの継承がはかられてきた。つまり、イエは血縁の連続性を犠牲にしても、家業によってうみだされた家産を代々ひきつぎ増大させるべき経済的単位でもあったのである。経済を優先するという意味で、日本のイエは血縁的紐帯のゲマインシャフトよりも利益を中心に編成されたゲゼルシャフトである、といった見解もある。この点、日本のイエは、漢人やコリアンにみられるような、初代の男系先祖からどこまでも枝分かれしていく父系血縁集団の編成原理とはおおく異なっている。(略)

他方、先祖祭祀とならんで重要なイエの祭祀に、屋敷神に対する一連の儀式がある。屋敷神は文字どおりには家屋と敷地の神を意味する。民俗学者の直江廣治によれば、その呼び名と祭神は地方によ

って異なるが、一般的な特徴としては次の点が抽出できるという。まず、屋敷内やその近隣の聖地に、イエないし一族が小さな、つつましい祠をたててまつるカミであること。第二には、先祖が開拓した土地や生業とくに稲作にむすびつくカミであること。第三には、三十三回忌や五十回忌のおわった先祖の霊が屋敷神になるという伝承があるように、祖霊信仰が屋敷神の性格に加味されていること。そして最後に、祠のある森の木を切ったり、定期的な祭祀をおこなったれば、人間にはげしくたり、家運がかたむく原因になると信じられていることである。

ビルの屋上にある祠が屋敷神の延長であることは、直江も指摘している。実際、会社には祠や神棚のあることがめずらしくなく、亡くなった経営者や従業員の供養のために家墓とは別に会社墓をもうけ、毎年追悼法要を執行しているところもある。つまり会社にも「屋敷神」が存在し、会社の「先祖」や「企業戦士」が祭祀の対象となっているのである。また工場をたてる時には、神道式の地鎮祭が執行され、社長が亡くなれば社葬をもつて顕彰と告別のセレモニーがとりおこなわれる。

(中牧弘允『会社のカミ・ホトケ 経営と宗教の人類学』による)



「差別」や「平等」という言い方は、一種の序列構造を前提にしている。自然数のように、大小の順番がつけられるという性質を「順序関係」と呼ぶが、「差別」の対義語として「平等」を指定する思想的態度は、順序関係という写像への信奉によつて非常に強く条件づけられている。

「差異は上下という関係に写像される」という世界観の下では、できるだけその差異を隠蔽して、均質なものとみなそうという動機づけが生まれる。そこに立ち現れるのは、世界がお互いに比較などできない多様なものによつて構成されているという豊潤さへの感謝ではなく、むしろすべてを中央集権的に価値づけようという「神の視点」につながる野望である。(略)

差別語とされる言葉をことさら使う人は品性下劣であるが(とくに相手が嫌がる場合には、あえてそのような言葉を使う必要はないと思う)、その一方で思想警察のごとき極端な「差別語狩り」には、以前から違和感を持っていた。その根本的な理由は、以上述べたような、差別をことさらに隠蔽しようとする思想の背後にある、画一的なメンタリテイにある。

世界には魑魅魍魎のごとき実に多彩なものがあふれており、その間に単純なる順序関係(上下の序列)などつけることはできず、生肉を食べようが、目が細かろうが、箸でものをつまもうが、それは「個性」であつて、「みんなちがつて、みんないい」と称揚されるべき差異である。そのような「覚悟」をもつて世界を見渡せば、美人だろがブスだろが、ハゲだろがオヤジだろが、別にいいだろう、と思えるはずだ。しかし、それは案外かなりラジカルで、それを生きることの難しいスタンスなのかもしれないと思う。

もともと、近代科学自体に世界観としての原罪がある。周知のとおり、ニュートンによる微積分の手法の発明、「万有引力」という構想自体が、世界の中の差異を消去し、すべてに普遍的に成り立つ法則を見出そうとする動機づけに基づいていた。目の前のリングと、天上に輝く月の間には、ナイーブに考えれば乗り越えがたい差異がある。両者が同じ万有引力の法則に従って運動するという

衝撃的な着想の中にこそ、近代の科学を発展させた起爆剤はあつた。しかし、それは同時に差異をどんどん無効化し、消去していく無限運動の始まりでもあつた。

それぞれ輝く個性をもつて屹立しているかに見えた生物種の起源が「突然変異と自然選択」という一般原理で説明され、子が親に似るといふ現象はDNAという単一の物質のバリエーションの問題に帰着し、そしていまや世界の森羅万象が等しくネットワーク上のデジタル情報の中に映し出される。男も女も、老いも若きもすべては差異の隠蔽された平等の楽園に取り込まれていくという「政治的正しさ」のプログラムは、ニュートン以来の近代科学のすばらしき成果と思想的に明らかに連動しているのである。

(茂木健一郎「『みんないい』という覚悟」による)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

「過去」にあった事実の集合が、そのまま「歴史」を構成するわけではない。その意味で、歴史は完成した詳しい「年表」ではない。長いあいだ社会科学の教科書の後ろに綴じられているのを見慣れ、あるいは小学校の教室の壁の長い巻き物のように貼ってあったからだろうか。われわれは歴史と聞くと、すぐにできごとを年号順に並べている「年表」の形式を思い浮かべてしまう。たしかに、年表はグラフなどと同じく、空間を利用した表示技術で、時間的な前後関係が一目でわかりやすい。だから歴史を、時間軸上に過去の記録を並べたもののように想像する人は少なくないだろう。

だが、違うのである。歴史は、過去の事実を足し合わせた結果ではない。ベンヤミンという哲学者が根本から間違っていると批判したのは、「均質で空虚な時間」の白紙に、さまざまな達成が書きこまれていくという、歴史のイメージであつた。ここでは空白の時間を埋めるかのように、大量の事実が召集され登録され、「歴史の一ページ」を構成する。この歴史構成の論理は、「足し算」である。過去は収集されるべき対象としてすでに完結していて、現在はいわばその「結果」の位置に、足し合わせられた答えとしてただ置かれていただけだ。

しかし歴史は、むしろ現在との「掛け算」である。現在に生きるわれわれの意味づけが掛け合わせられて、はじめてそこに歴史として存在する。現在から意味づけられることがないできごとは、年表に記されないばかりか、じつは事実としてまだ存在していない。「歴史」という構造物の場を形成するのは、均質で空虚な時間ではなくて、「いま」によつて満たされた時間である」というベンヤミンのことばは、過去のできごとと現在の意味との間の掛け算として歴史をとらえるという、見方の転換を提起している。(略)

だからそれぞれの個人がそうであつたと思つてゐる歴史(history)は、客観的な事実の知識というより、人間の想像力がつくりあげた認識としての事実、過去に関する物語(story)なのである。ゆえに、過去は変えられないが、歴史は変えられる。そして「現在」という事実は、目で実感的に見ることができても、「歴史」という認識は、誰からも直接的には見えない想像の領域で

しか共有されない。けつきよくのところ、残された証言や記録や遺跡や事物などの痕跡から、つながりを推理し、そこに作用していただろう関わりを組み立ててみる以外には生み出しえない。ここに於いて知るべき歴史とは、学校のテストや入試で求められるような、すでに決められている「正解」ではない。歴史はいつも、たつた一つの真実や事実を正解とするものではない複数性をもつて現れる。今日の世界を見渡してみればすぐに気づくように、たとえば、パレスチナ世界の側から語られ信じられている歴史と、イスラエル世界の側から語られ信じられている歴史とは、容易に和解できないほど鋭く対立している。もちろんパレスチナやイスラエルの内部も単一ではなく、さまざまな解釈のゆらぎを有しているだろう。あえて正解という表現にこだわりたいなら、「正解は一つではなく、何が正解でありうるかは、まだわかっていない」といつてもいい。大人になることの解釈が一つだけではないのと同じように、知るべき歴史もまた、一つ一つの「単語」レベルの事実ではなく「文脈context」レベルにおける原因と結果の関連づけの物語であつて、一つしか正しいものが許されないかのような形にまで限定された過去の「事実」ではない。

(佐藤健二『歴史と出会い、社会を見いだす』による)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

子規が、西洋画を通じて理解した「写生」とはどのようなものだったのだろうか。かれが語るところによれば、日本の絵画界でも百年ほど前から写生というのをやかましくいうようになってきた。これはおそらく、司馬江漢、あるいは秋田蘭画の活動を指しているのだと思われる。だが西洋画であろうと、日本画であろうと自然の写生を離れて絵画が成り立つはずがない。ところが日本ではある時期から奇妙な発達をして、どんな実物からはなれてしまった。東山時代の水墨画はその最たるもので、一見して鯉や鯉やら区別もつかない、符牒のような絵になってしまった。その反省から出てきた一種の写生画が光琳の没骨画だが、これは草木のほかに描けない不完全なものでしかなかった。その後を受けたのが、応挙や呉春一派の輪郭的写生であったと、このように子規は説明するのである。

全体は無論輪郭づくめであるから、色々無理が出来て、終に理屈の写生に落ちてしまふた。例へば鯉を画くと三十六枚の鱗がチヤンと明瞭に一枚一枚見えて居る。東山時代の鯉も乱暴だが、鱗が数へられるのも変なものである。(中略)

そこで油絵が這入って来ていよいよ写生が完全に出来るやうになった。此写生は無論感情的写生であつて、人が物を見て感ずる度合に従ふて画くから、鯉を画いても鱗を三十六枚画きはせぬ。さりとして東山時代のやうに大きな点を打って鱗の符牒にして置くのでは無い。それで実物見たやうに出来る。これは没骨画なるがためであつて、輪郭の代りに絵の具が自然の輪郭を為るのである。即ち絵の具が唯一の道具である。絵の具を擯斥した日本人には思ひもよらなかつたであらう。此油絵は一から十まで写生するので、殆ど写生で無い者は無い。此頃では日本画でも写生写生といふ位になつて写生といふ事は大人に知られて来たが、まだ油画の写生を誤解して居る人が多い。(「写生、写実」『ホトトギス』第二卷第三号)

ここで注目しなければならぬのは、「理屈の写生」と対で用いられている「感情的写生」とは何かということである。それは「人が物を見て感ずる度合」に従つて画くことだと説明されている。子規が最初に「写生」に夢中になつたのは、目の前の自然をひねくり回すことなく、あるがままに客観的に描写するだけで、従来の月並風とは異なつた魅力ある句が次々と生み出されていったことにある。ところがやがて、自分の眼で見たように表わすこととは、実は客観的な自然を主観化して捉えることなのだという事に気づいたのである。(略) 芸術とは、ひとことで言えば「発見」の世界である。その表現には、当然のことながら芸術家の美感に基づく取舍選択がなされている。子規も述べているように、現実の花より、時として画かれた花のほうが美しいのはそのせいである。はなから風雅な、あるいは風流な世界があると決めてかかるのが月並宗匠風というものである。名所旧跡、花鳥風月を詠まなければ句にならないというのは甚だしい観念論である。芸術の素材、つまりモチーフは私たちの周辺にいくらでも転がっているのだ。それを発見するのが、芸術家の素質であり、才能というものだろう。子規は次のように喝破している。「風流はいづくにもある可し」(「俳諧大要」)と。

(神林恒道『近代日本「美学」の誕生』より)



レンブラントのそうした作品の中から、有名な傑作ではあるが、ぼくはここにやはり、『ユダヤの花嫁』を選んでみたい。彼の死に先立つ三年前に描かれたこの作品のモデルは、息子のティトウスとその新婦ともいわれ、また、ユダヤの詩人バリオスとその新婦ともいわれている。さらに、旧約聖書の人物であるイサクとリベカ、あるいはヤコブとラケルをイメージしたものだともいわれている。しかし、そうした予備知識はなくてもいい。茶色がかって暗く寂しい公園のようなところを背景にして、新郎はくすんだ金色の、新婦は少しさめた緋色の、それぞれいくらか東方的で古めかしい衣裳をまとっているが、いかにもレンブラント風なこの色調は、人間の本质についての瞑想にふさわしいものである。そうした色調の雰囲気の中で、いわば、筆触の一つ一つの裏がわに潜んでいる特殊で個人的な感慨が、おおらかな全体的調和をかもしだし、素晴らしい普遍性にまで高まって行くようだ。この絵画における永遠の現在の感慨の中には、見知らぬ古代におけるそうした場合の古い情緒も、同じく見知らぬ未来におけるそうした場合の新しい情緒も、ひとしく奥深いところで溶けあっているような感じがする。こうした作品を前にするときは、人間の歩みというものについて、ふと、巨視的にならざるをえない一瞬の眩暈とも言ったものを覚えるのである。

ところで、この場合、問題を集中的に表現しているものとして、新郎と新婦の手の位置と形、そしてそれを彩る筆触に最も心を惹かれるのは、きわめて自然なことだろう。なぜならそれは、夫婦愛における男と女の立場のちがいが、そして性質のちがいを、まことに端的に示しているように思われるからである。男の方の手は、女を外側から包むようにして、所有、保護、優しさ、誠実さなどの渾然とした静けさを現わしているし、女の方の手は、男のそうした積極性を今や無心に受け容れることによって、いわば逆の形の所有、信頼、優しさ、献身などのやはり溶け合った充実を示しているのだ。

ぼくが嘆賞してやまないのは、こうした瞬間を選びとったというか、それともそこに夥しいものを凝縮したというか、いづれにせよ、狙いあやまらぬレンブラントの透徹していかにも慈しみに溢れた眼光である。暗くさびしい現実を背景として、新しい夫婦愛の高潮し均衡する、いわばこよなく危うい姿がそこには描きだされているのである。

ぼくは今、「危うい」と書いた。それは過酷な現実によって悲惨なものにまで転落する危険性が充分にあるというほどの意味である。その悲惨は、人間が古昔から何回となく繰返してきた不幸である。しかし、この絵画にかたどられようとしている理想的な美しさは、人間が未来にわたってさらに執拗に何回となく繰返す希望といったものだ。

（清岡卓行『手の変幻』）



ところが、突然、ソ連が崩壊して言語に対する統制も検閲もなくなり、西側の文明がどつと入ってきた。いま、モスクワの町中に氾濫する外来語の膨大さには、驚くばかりだ。モスクワの大型書店「ドーム・クニギ」に行っても、「インターネット」「マネジメント」「マーケティング」といったコーナーばかりで、これがトルストイやドストエフスキーを生んだ偉大な文学の国のなれの果てか、と、ロシア文学びいきの日本人としては、ついなげかわしい気持ちにもなろうというものだ。

しかし、その一方で、日本の都会ではとうに失われてしまった言葉の生々しさのようなものが、現代のロシアではいまだに保存されているということも見のがしてはならない。ロシア人たちは、ほんのちよつとしたことをきっかけに、たとえ見知らぬ他人どうしであっても、驚くほど多くの言葉を費やして、自分の考えと感情を相手に直接ぶつける。それは情報伝達の行為というよりは、言葉を通じて互いの存在を認識しあう共同体の儀式にも似ている。おそらく二一世紀の日本で今後、どんどん失われていくのは、まさに言葉のこういった機能ではないかと思う。

コンピュータ技術が飛躍的に発達し、これから社会の「情報化」がますます進展していくことだろう。商取引から恋愛まで、すべてはインターネット上のヴァーチャルな体験に置き換えられ、一步も自分の部屋を出なくとも生活が何不自由なくできるという時代が来るのも夢ではない。しかし、そうなったとき、決定的に失われる危険があるのは、個人的な接触を可能にし、互いに同じ人間なのだということを実感させてくれる言葉の機能である。こういった言葉の基本機能のことを、言語学者のヤコブソンは「交感機能」と呼んでいるが、これが失われたら、言葉は言葉でなくなってしまうと言っても過言ではないだろう。

では、そのとき言葉は何になるのか。おそらく「言葉もどき」、オーウェルの表現を再び借りれば、新たな「ニュースピーク」ではないか。ニュースピークとはなにも、過ぎ去った過去の亡霊ではない。それは、人間から個性も思考力も奪い、社会を構成する者全員を画一化する新たな、より強力な全体主義の時代に、再び装いも新たに現れることだろう。

なんだか見通しの暗い予報になってしまったみたいだが、正直な

ところを言えば、そんなニュースピークの時代が本当に到来するなどととは考えたくない。これはあくまでも一種の警告である。妙なことを言うようだが、おそらく私たちは、言葉という不思議な生き物の未来については、人類の未来について以上に楽観的になってもいいのではないだろうか。

というのも、言葉は人類のありとあらゆる惨事と残虐と愚かしさを目撃し、克明に記録しながらも絶望することなくしぶとく生き延び、時代の激変を通じてみずからもしなやかに変容しながら、それでいて言葉でありつづけることを止めないで今日まで来ているからだ。ぼくは人智を超えた神秘的な言霊などのことを言っているわけではない。言葉は人間の作り出したものでありながら、人間以上の生命力を持ち、人間社会を逆に作っていく働きさえ備えている。コンピュータ程度の発明に簡単にやられはしないだろう。しかし、それは潜在的に恐ろしい力でもあり続ける。言葉を支配する者は、結局のところ、世界を支配することになるからだ。

（沼野充義『W文学の世紀へ』）



単純な「個人化」というものそれ自体は、実際には近代を通じて一貫して生じてきた出来事だと言える。一九六〇年代に活躍したアメリカの社会学者、タルコット・パーソンズの「パターン変数」が典型だが、近代とは、集合体志向を有する前近代社会と比して、個人志向を有する社会であるというのには、社会学の中では長い間語られてきたトピックである。しかし、ベックなどが語る「個人化」は、後期近代によって新たな段階に入った、社会と個人との関係に照準しているのだ。

たとえばスコット・ラッシュユのような社会学者は、近代の個人化のプロセスを二段階に分けられると考える。第一段階の近代と、第二段階の近代では、個人化のモードが異なるというのが彼らの主張だ。すなわち、第一段階の近代において生じるのは「リニアなモードの個人化」であり、第二段階において生じるのは「ノンリニアなモードの個人化」であるというのだ。

リニアなモードの個人化の特徴は、いわば「我思う、故に我あり（I think, therefore I am.）」といったものだ。社会学における自己論はこれまで、社会心理学者G・H・ミードによる説明に代表されるように、人は様々な社会関係の中で必要とされる「役割」を、発達過程の中において学習し、そうした社会関係に応じて変化する「客我（me）」を統一的に把握する「主我（I）」との二重構造において自己意識を獲得するものと考えてきた。「客我」とはつまり「知られる私」ということなのだが、「知られる私」のことについて「知る私」としての「主我」を、通常は「アイデンティティ」と呼ぶ。

しかし、ノンリニアなモードの個人化においては「我は我なり（I am I.）」という断定のみが存在する。前者に存在するのは「反省（reflection）」だが、後者では「再帰（reflex）」が、個人化を特徴づけている。つまりそこには、私が私であることの確信になるような内的メカニズムが欠如しており、個人とは、他者との関係の中でころころ変わる「知られる私」の集合に過ぎないということになっているわけだ。

ノンリニアなモードの個人化においては、知られる私の「わたしは、わたし」という無反省な断定のみが、自己を支えているのである。

こうした傾向は何も抽象的な社会理論のみならず、経験的な調査データでも示されつつある。若者を対象にしたアイデンティティ

に関する各種調査からは、彼らが、対面する友達やその時の場面に応じて、自分の「キャラ」を自在に変化させている様子が浮かび上がってくる。と同時に、彼らにはそうしたたくさんの「キャラ」を統合する自己イメージが乏しいという傾向も見られるのだという。社会学がこれまで想定してきた自己は、社会関係の中で自分に期待される役割を取得し、それを統合する自我を育て上げる「社会化（socialization）」の働きを非常に重視してきた。しかしながらノンリニアなモードの個人化が進行する社会においては、他者との関係の中で必要とされる役割（me）を取得し、それを的確に演じ分けるアイデンティティ（I）を取得する、といったような「社会化」のプロセスは弱体化せざるを得ない。むしろ必要となるのは、場面場面に応じて臨機応変に「自分」を使い分け、その「自分」の間の矛盾をやりすごすことのできるような人間になること——いわば「脱社会化（Desocialization）」なのだ。

（鈴木謙介『カーニヴァル化する社会』による）



科学が感覚世界から離れてしまうと、解毒剤として科学のはたらきが消える。だから科学がイデオロギーになったり、信仰になったりするのである。個人的なことだが、若いときの私は、いちおう科学者の業界で生きようとしていた。ただどうしてもなじめなかったのは、科学のなかでの「同じ」という部分である。科学は感覚の世界を基礎とする。そこから「同じ」世界を見直すだけのことである。そう思えば、話は簡単だった。しかし客観的とか、独創的とか、モノに即すとか、理論的とか、とにかく当たらずといえども遠からずという表現ばかり周囲から与えられたから、実際には「科学の世界でなにをしたらいいか」、よく理解できていなかった。だから私は「科学者」になりそびれたのである。

解剖をやったのは、その意味では正解だった。若いころ、私の脳には抽象的な傾向があった。つまり放つておけば「思想がある」、つまり「同じ」世界しか存在しなくなったに違いない。ところが死体というものは、抽象とはもつとも遠い世界である。死体という言葉すら、私はじつは使いたくない。なぜならそれは既成の言葉であって、実際には死体とは死体という言葉で意味されるようなものではないからである。それは一人一人違っていて、「感覚の世界」と私がいう、それそのものである。

虫の世界も同じである。世間で暮らせば、虫は虫である。ところがその多様さは、ほとんど気も狂わんばかりである。日本のヒゲボソウムシは、ついこの間まで、たかだか十種ほどだったが、今年は新種に名前がつけられて、二十種ほどに増えるはずである。それで終わるかというなら、まだ種数が増えたと私は確信している。それを生物多様性というのだが、この言葉が世間によく通じないのは、すでに世間では「同じ」世界が優越しているからである。お金がそうで、経済がそうである。商品にはじつは「同じもの」しかない。そうでないと、値段がつけられない。まったく独特のものには、値段がつけられないからである。

世間では、
「虫は要するに虫だろ」
という。つまりすべては「同じ」虫なのである。そこには生物多様性なんかない。ここには言葉が基底にあって、それ以下に潜ろうと

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

しないという、いまの世間の態度がみごとに示されている。同様にして、
「死体は死体だろ」
で世間の話は終わる。しかし、言葉より以下に「降りなければ」、言葉創ることはできない。だから現代人は「既成の言葉をただ運転している」と私はいう。それをコミュニケーションなどと称するのである。それで人生が済むと思っていられるのは、自分以外のだれかが感覚世界と格闘してくれているおかげである。そんなことは、夢にも思っていないであろうが。

(養老孟司『無思想の発見』による)



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

いまでは歩きながら考えるということがなくなつたと嘆いたのはアドルノだが、散歩するということは、思考にとって思わぬ刺激となる。机の前ではものを考えられないという人も多いだろう。精神の働きは、身体の揺れから大きな影響をうけるのだ。歩いている周囲の風景が展開し、新しいものが見えてくるたびに、思ひは誘われる。ここでは、思索することにおいて、身体の移動という単純な行為がどれほど重要な意味をもつことがあるかを考えてみよう。散歩とはときには思考の対象そのものになることもあるのだ。ストア派はアゴラのストア（列柱）の回りを歩きながら思考を深めたのだし、エピクテトスは散歩することを自己の鍛錬のための大切な手段だと考えていた。散歩しながら町でさまざまな人と行き違う。美女を見て、ああ、あんな女性の愛人になれたらというような欲望に動かされなかったか、富んだ人を見てうらやましいと感じなかったか、権力者を見て、何か頼みたいと思わなかったか。自分の魂の動きを吟味するために散歩が利用されたのだ。

近代にいたつても散歩を思考の習慣とした人物にルソーがいる。歩くことはルソーにとつては、みずからとの一体感を味わうための重要な方法だった。『孤独な散歩者の夢想』ではルソーは、歩きながら浮かんでくる夢想を記録することが自分の心の状態を記述するための最高の方法であると、次のように語っている。「この孤独と瞑想のときが、一日のうちで、気が散ることもなく、妨げられることもなく、私が十全に私であり、私自身のものである、そして自分が自然の望んだとおりのものであるとほんとうに言うことのできる、唯一のときなのである」。

またニーチェは歩きながら考えた。歩くたびに新しい思考が生まれる。その思考の種子を鉛筆でなぐり書きする。そして帰宅すると、その思考の種子に水をやり、思考を展開させる。散歩をしていると唐突に驚くべき思想が訪れるのだ。永遠回帰の思想もこうしてニーチェを襲った。「あの日わたしはシルヴァプラーナの湖に沿って森をいくつか通り抜けて散歩していた。スールレイの近くにピラ

ミッド型にそびえている巨大な岩があり、そこで立ちどまつた。その時この思想がわたしに、到来した」。ニーチェは本を読むことを軽蔑していた。歩きながら生まれた思考の芽生えを育てるためにこそ、残された時間を費やすべきだと考えたのだ。

ルソーもニーチェも歩きながら、ほとんど外の光景を眺めていない。自分の心に浮かぶ思念が重要なのであり、歩行という営みは、その思念を生みだすための身体のリズムなのだ。だとすれば、歩行するのは街路や高原である必要はない。ときには部屋の中だけでも歩けるだろう。カフカは、二種類の旅を対比させている。外延的で組織された旅と、内包的で、「破片、難破、断片による旅」である。

最初の旅では旅人は外の世界を歩きまわる。旅には手配や組織が必要であり、外の光景が必要である。しかし第二の旅で重要なのはその内的な強度である。だから自分の部屋の中でも実行することができ。ドゥルーズはカフカがこの強度の旅について、「自分だけの遊歩道がつかれない場所はどこにもない」と語っていたことを指摘する。部屋の中を歩きながら、あるいは部屋の中で横たわったままで、カフカは内的な旅を強行する。夢の中ですらカフカはつねに歩きまわっているのである。

（中山元『思考のトポス 現代哲学のアポリアから』による）



「患者が最後まで希望を持つことができるためにはどうしたらよい
か」ということは、ことに重篤な疾患にかかわる医療現場において
切実な問いである。病気であることが知らされる——だんだん状態が悪
くなることを知り、有効な対処法はないことも知る——自分の身体が
だんだん悪くなり、できることがどんどん減って行く——死を間近に
感じるようになる。

このような状況で、「希望」とはしばしば、「治るかもしれない
い」という望みのことだと思われている。あるいは「自分の場合は通
常よりもずっと進行が遅いかもしれない」ということもある。いず
れにしてもまさに「希望的」観測である。だが、希望とはこうした内
容の予測のことなのだろうか。

もしそうだとすると、それこそ確率からいって、そうした患者の多
数においては、はじめに立てた希望的観測が次々と覆されるとい
結果にならざるを得ない。それでは「最後まで望みをもつて生きる」
ということにはならないだろう。そもそも、「癌」と総称される
疾患群をモデルとして、「告知」の正当性がキャンペーンされてきた
のは、患者が自分の置かれた状況を適切に把握することが今後の生
き方を主體的に選択するために必須の前提であったからではなかつた
か。右に述べたような望みの見出し方は、非常に悪い情報であつても
真実を把握することが人間にとってよいことだという考えとは調和し
ない。

では「死は終わりではない、その先がある」といった考え方を採用
して、希望を時間的な未来における幸福な生に託すというのはどうだ
ろうか。だが、医療自らが、そのような公共的には根拠なき希望的観
測に過ぎない信念を採用して、患者の希望を保とうとするわけにはい
かない。

ところで、死は私たち全ての生がそこに向かっているとどこであ
る。遅かれ早かれ私の生もまた死によって終わりとなることは必至で
ある。その私にとって希望とは何か——考えてみればこの問いは、
重篤な疾患に罹った患者にとっての希望の可能性という問題と何ら
か連続的であろう。そして、多くの宗教は死後の私の存在の

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

持続を教えとして含み、そこに希望を見出そうとしてきた。それは人
間の生来の価値観を肯定しつつ、提示される希望である。だが他方宗
教的な思想には、死後の生に望みをおく考え方を拒否する流れもあ
る。その場合は、人間はもつとラディカルに自己の望みについて
突き詰めるのである——「死後も生き続けたいという思いがそもそも
我欲なのである」とか、「自己の幸福を追求するところに問題があ
る」というように。それは生来の価値観を覆しつつ提示される考え
である。では、死が私の存在の終わりであることには何の不都合もな
いではないかとして、これを肯定した場合に、希望はどこにあるか
——どのような仕方であれ、「死へと向かう目下の生それ自体に」と
応えるしかないであろう。

終わりのある道行きを歩むこと、今私は歩んでいるのだということ
——そのことを積極的に引き受ける時に、終わりに向かって歩んでい
るという自覚が希望の根拠となる。そうであれば「希望を最後まで持
つ」とは、実は「現実への肯定的な姿勢を最後まで保つ」ということ
に他ならない。つまり、自己の生の肯定、「これでいいのだ」という
肯定である。「自己の生」といっても、生きてしまっている生（
完了形）としてみること、生きつつある生（進行形）としてみる
こととの二重の視線がある。完了したものという生のアスペクトに
おける肯定は「これでよし」との満足である。他方、生きつつある
生、つまり一瞬先へと一歩踏み出す活動のアスペクトにおける、前
方に向かつての肯定、前方に向かつて自ら踏み出す姿勢が、希望に他
ならない。

（清水哲郎『死に直面した状況において希望はどこにあるか』よ
り。一部省略）



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

読解問題 10月4週分

問1 読解マラソン集1番「次の文章はテレビ朝日の」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 限られた予算で合理性を追求することが、個性的なリフォームを生み出す
B リフォームする前の「不幸な家」は、きわめて個性的である
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集1番「次の文章はテレビ朝日の」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A リフォームは、ものを捨てるいい機会になっている
B 物が整理されていないのは、「理想の家屋」像が未来にあるからである
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集2番「法律学は、非常に精緻な」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 法律は、一般の人には理解できない秘伝奥伝で人々を支配するために作られた
B 法律学の理論は、自然科学の理論と違い、人々がそれを欲するかどうかによって影響される
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集2番「法律学は、非常に精緻な」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 価値判断と価値体系の関係は、経験的事実によって検証できる
B 法律学の目的は、価値体系の選択である
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集3番「日本にはそれぞれのイエに」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 日本人にとって、イエは、血縁集団以外のものも含む社会的単位である
B 日本では、会社などが行う宗教的な行事に抵抗を感じる人が多い
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集3番「日本にはそれぞれのイエに」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 政治団体としての政党は、一種のゲマインシャフトである
B 韓国や中国のイエは、父系の血縁集団として構成されている
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集4番「『差別』や『平等』という」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 「差別」は序列構造を前提にしているが、「平等」はその序列構造を否定するものである
B 上下の差異をなくすという発想は、それぞれの個性を生かすという神の発想である
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集4番「『差別』や『平等』という」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 「差別語狩り」は、中央集権的な発想を批判している
B 「差別語狩り」は、上下の差異を前提にしている
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 11月4週分

問1 読解マラソン集5番「『過去』にあった事実の」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 過去は、現在との関連で存在する

B 現在から意味づけられない事実は、存在しないものとして扱われる

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集5番「『過去』にあった事実の」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 最近では、テストや入試でも、正解は一つではないと教えている

B 歴史において、何が正解かはわかっていない

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集6番「子規が、西洋画を通じて」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 日本文化はもともと写生を大切にしてきた

B 写生をするには、正しい理屈の裏づけが必要である

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集6番「子規が、西洋画を通じて」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 自然をあるがままに描くことが、実はその人らしい見方で描くことである

B 現実の花より、描かれた花の方が美しいのは、人間には風雅なもの選ぶ力があるからだ

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集7番「レンブラントのそうした作品の中から」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 「ユダヤの花嫁」は特定の個人を描いたというよりも、普遍的な人間の姿を描いているようだ

B こうした作品は、巨視的な見方で見る必要がある

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集7番「レンブラントのそうした作品の中から」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 二人の手の位置には、長年連れ添ってきた二人の互いに対する信頼が感じられる

B この絵からは、二人がこれから過酷な現実遭遇するだろうことが予想される

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集8番「ところが、突然、ソ連が崩壊して」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 言葉は、情報伝達機能が少なくなるほど、交感機能が強くなる

B 交感機能のない言葉は、「言葉もどき」となる。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集8番「ところが、突然、ソ連が崩壊して」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 「それは潜在的に恐ろしい力でもあり続ける」の「それ」はコンピュータである

B 言葉が人間以上の生命力を持っているのは、言葉が人間とは別のところで生み出されたものだからだ

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 12月4週分

- 問1 読解マラソン集9番「単純な『個人化』というもののそれ自体は」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 近代とは、個人志向を有する前近代社会と比較すると集合体思考を有することを特徴とする
B 近代に属するのは反省だが、近代以前に属するのは再帰である
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×
- 問2 読解マラソン集9番「単純な『個人化』というもののそれ自体は」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 現代の若者は、場面に応じてたくさんのキャラを使い分けるが、そのキャラを統合するイメージに乏しい
B 現代の若者は、役割を取得するということが得意である
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×
- 問3 読解マラソン集10番「科学が感覚世界から離れてしまうと」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 科学者の業界では、客観的とか理論的とかいうことを要求しがちだ
B 解剖は、一人一人違っている感覚の世界である
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×
- 問4 読解マラソン集10番「科学が感覚世界から離れてしまうと」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 商品の世界では、多様性が特徴となっている
B 「虫は要するに虫だろ」というような言葉の世界から降りなければ、言葉は創造できない
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×
- 問5 読解マラソン集11番「いまでは歩きながら考えるということが」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 精神の働きは、身体の移動という単純なことからも影響を受ける
B ルソーにとって、散歩はみずからとの一体感を味わう方法だった
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×
- 問6 読解マラソン集11番「いまでは歩きながら考えるということが」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A ニーチェは、繰り返し読書の大切さを説いた
B カフカの言う内包的な旅には、手配や組織が必要である
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×
- 問7 読解マラソン集12番「患者が最後まで希望を」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 患者の多数において、「治るかもしれない」という「希望」は覆される
B 「死は終わりではない」ということを、公共的な医療は伝える必要がある
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×
- 問8 読解マラソン集12番「患者が最後まで希望を」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 希望は、死後の世界にあると応えるしかない
B 生を、生きつつある生として生ることが希望である
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

10～12月

小1 コード： nane パ ス： PDF	小2 コード： nane パ ス： PDF	小3 コード： nane パ ス： PDF
小4 コード： nane パ ス： PDF	小5 コード： nane パ ス： PDF	小6 コード： nane パ ス： PDF
中1 コード： nane パ ス： PDF	中2 コード： nane パ ス： PDF	中3 コード： nane パ ス： PDF
高1 コード： nane パ ス： PDF	高2 コード： nane パ ス： PDF	高3 コード： nane パ ス： PDF